

私にとっての「研究」とは

この度、研究推進委員会から身に余るお誘いをいただき、教員と大学院生としての「研究」の違いや学会に参加することなどについて、私なりの考えを書かせていただけることになりました。多くの方々に稚拙な文章をご覧いただくことは、たいへん恐縮ですが、これも私にとっての「研究」だと捉え、チャレンジさせていただきます。

連載は、次のような4回を予定しています。

第1回 学校現場で生じた「研究」の悩み

第2回 教員としての「研究」と研究者としての「研究」の違い

第3回 学会で学ぶということ

第4回 「研究」を支える人とのつながり

第1回目となる今回は、「学校現場で生じた『研究』の悩み」と題し、私の教員としてのキャリアも紹介しながら、書かせていただきます。

大学を卒業したばかりの2000年4月、私は兵庫県尼崎市立M小学校に着任しました。当時は、総合的な学習の時間（以下、総合）が学習指導要領に明記され、本格実施される移行期でした。そのため、M小学校でも生活科・総合を柱として校内研究に取り組んでいました。当時の研究主任、是枝周二先生をはじめ、多くの先生方から、生活科・総合の面白さや指導案の書き方、授業研究の在り方などを教えていただきました。この時は、同じ学年を組ませていただいた先生方と議論を交わし、単元や授業を作ることが、私にとっての「研究」でした。

尼崎市で3年間教員としての基礎を学ばせていただいた私は、出身地である兵庫県加古川市に異動しました。そして、2005年4月、急遽体調を崩された先生の代役として研究主任を務めさせていただくことになりました。本当に突然のことでしたから、当時の私に学校内の研究を推進していく力もありませんでしたし、その方法さえもわかっていませんでした。私は、加古川市教育委員会

指導主事であった金川晋也先生に師事を仰ぎ、校長先生、教頭先生をはじめ、多くの先生方に助けられながら、生活科・総合を柱とした校内研究を推進しようとなりました。目の前の子どもたちの課題や良さを見つけ、課題を改善するとともに、良さを伸ばしていくための授業づくりに、学校をあげて取り組もうとなりました。生活科・総合に限らず、国語科や体育科、道徳なども校内研究の柱とし、単元作りや授業作りを行い、学校としてどのように授業研究を進めていくのかということが、私にとっての「研究」となっていました。

どの教科や領域を「研究」の中心に据えても、子どもたちの「生き方を探求する」授業を行うことが、私にとって一番の「研究」であり続けました。この「生き方探求」こそが、キャリア教育の世界に足を踏み入れるきっかけとなりました。

一方で、学校内の研究を推進していく上で、常に悩みを持ち続けていました。単元作りも授業作りも研究推進計画も、何かしらの理論に裏付けられたものではなく、私の経験によるものでした。全国の優れた学校を視察し、その実践事例を参考にさせていただきましたが、文献を読み深めることもなく、いわゆる「いいとこ取り」をしてきただけでした。

また、子どもたち同士が学び合う授業を試みると、事後研究会で必ず次のような議論になりました。それは、「今回の授業は、意見の羅列で終わってしまった…。」「もっと、子ども同士の発言をつなげる必要がある…。」「〇〇さんの発言が、授業の中核であった。しかし、その意見を深めきれなかった…」というものでした。参観者としてなら、「あ、今の発言が大切だ！」と気付くことはありました。しかし、授業者では、板書や次の展開を考えることに精一杯で、なかなか気付くことができませんでした。気付いたとしても、その発言をうまく授業の流れに乗せることができませんでした。ですから、この議論の解決策をなかなか示すことができませんでした。

このような教育理論、研究方法、授業方法を学びたいと何年も思い続けていました。しかし、日々の業務に追われる学校現場では、これらの悩みに真正面から向き合うことはできませんでした。そこで、じっくりと腰を据えて「研究」するために、私は大学院に進むことを決めたのです。

次回は、「教員としての『研究』と研究者としての『研究』の違い」について、大学院での学びを中心に書かせていただきます。

(加古川市教育委員会 伊藤良介)